



門昭 4
第 327
卷 2



酒宴の器物と事

酒宴には是禮式多く礼儀正し假物不備
なる事致せば剛々碎々後々亦也易記不
形れも是和生るの礼ととり各々之ひ舞後
ハ和ふと記て強々是るも亦之和器物の多記
を雅ととく日本の外器耳盃湯桶柄酌
盃盃の形器金持筒の付るを収め之
是は酒宴の酒器少用也之道具之時不不
の老不留川長を居つと通河村亦所と記

の内シラヌカより少納梅のかせり場所を定め
此シラヌカも位長せりしつ時其奴れし名より
ソヤハと子ハ悪物ハ何れ許さ悪物ハ
とより通河も是宗泥んて何れらと
依てお示表、て方をいひ送りけり彼場所
の主人被さるといひしつと令あつた令
ををいひしつ此案の内ハ令走紙
内も亦も令走し不揮りたり長
とられハ之れを彼のし名ハ
コタカ

コタカ聞くと之れをいひて
良悪物ハとせり依て使を
且つ其を授てた少収ハ
取物ハよも何れしと
付代り物ハ不色教
佐たりしつり買
あつて彼校業を
近ハ悪物も多
とてた少収ハ
取物ハよも何れしと
付代り物ハ不色教
佐たりしつり買
あつて彼校業を
近ハ悪物も多
とてた少収ハ

と云せし是を死せんとすといふ處に濁酒を造りて
近村近所の己名の長妻土を掘りて彼毒物に
めの酒妻を詰めたり 時不彼村衆を物知り濁
酒を十分に盛り申す處の中央より長妻たり申す
乙名堀妻も此毒物を見て腫をつね 左今不
比物知りて防ぎてまじりて置く 奥を
けり酒妻も既不飲んば不彼村衆も既不飲ん
内を造りて今之は元元けりて是を見て
一中し長妻を掘り大幣大不無を造りて申す

毒かりりれは亭をこれコタカ大少怒りて曰我は
悪物成末め一財莫大の代悪物と交易せし不
めけの物也物を飲く我毒物を奪ひたり
あらんとて憤りて是を以て運上り屋少りて酒
長妻の少運してコタカ曰彼防ぎに今之は物知
人飲濁酒を造りたれは内ハ悪く元けりて不
宜不長妻の是を申して大不困り今之は物知
りて防ぎ物に毒物を入る 衆も水酒を入る
衆もくハ之を事を知り候ひりて不有

せしとて伐物莫く出く交易も一ゆきのるひ
入の遠くは只途不詳なる也欺れざる疑り
塊りたる序意地をう解させざる社名くやれり
於て蝦夷の魚物亦酒賣小の用く亦月(元
ふく東乃相の元々すれは是河入事也一

氷海の記事

天の古 西平は月月中旬クナリ流の内イシヨマ
ソの新小云船く少を伐樹形高せか干夜
世宣の只風烈な次りぬハ水主は蝦夷人云云

ハ海上より白く見えて氣味也一と云れた何し
を飲も云へは十百ハ尋れて四三羽少海上を覆れハ
遠伸ハ一面ハ氷の山とぬり一と氷の層ハ古同乃至
十餘間或も二十間たりもまうし海上の水面ハ古
尺餘ハさく流れ上り氷下ハ何れも氷りな
飲減ハ堅氷山とぬり此氷皆北海の吹高し
古海より波浪を一伝く通船はさるる能うぬハ
古林序ぬせり土地の蝦夷人ハ氷ハ氷ハ氷移
りて遠の沖小出く海産物さらい一等を採捕

縛縊く一室小亭死しり前後たふ小盤
大勢群集一柳せ柳を柱せ等を入進堅固小
圍い首赤小幣を建く鋒太刀長刀千升程
の長忍を飾りて後上干村の石を納め干親
れ乃近の近村ちまゝく老集りく柳まの家格
判古赤小周りく席小先後上下何り其席小色を
之中何り於身射孔有終く少牙を柄く矢
を故川蓋目の射法のみ一干孔式終りて後大
幣ありて捧責ありく終ま之終り終りて後小

干死骸少終りの供物ちを極く佛家の百味の食
を極く施餓鬼供養をせしめ一此礼式終りて
後其供物等を以て近の近村小賑賜はるる干後
彼魚の皮肉を分けて首赤皮を付て無赤小飾り
毛尻肉ハ柳皮で煮焼一濁酒を以て大酒宴を
終り終夜賑をり是大祭の式礼之出人足とを
イヨウヤニテといふ外大集りる事之是大身
高野宮の石名の家名利小具行はるとし年中
海上ありて終り小家共集をせしるの終り

あふふあのみを月八をふりて子九のアモウを
はる時のもの如く子散ら母恋たの母のたれたるふ
似たりあつたを移後もを移たたつたを移たつた
つんてあつた各一子あつたを移トロくトロくつふ
ても移つてく五人も七人も子散定うの向きつ
方、向て移ふあつたを移つて是鶴舞の舞へ
親も足弟妻あつた死去の時イムイとてウカリ
小頼一も礼成て子あつたハ死別の愁傷の伏念
を志おさめんあつた毎つたはつたをえけつてイムし

トイとふ大カカ又物のむひもつた勢あつたふ
額をくら合血成あつたおあふ血成見つたハ
止めた血のあつた移りて止つたおあふ人そをえ
けつて吊あつたつたは愁傷の伏念を各散て
新たふ清浄成直は性成入進つた移後必
へつた時つた湯酒をえつた移りてつたハ大
小其費用のつたつた

歌踊し書

天の六丙午の年余東蝦夷のゆくと先題せし時

七月下旬上トロウは不涉海一西浦をあり北浦を尋
車庫をあり時不友船と被布一か三三也百俄不雲
霧起り先船の友船も是之舟ト以友船不後也トを
山石少路の向を向て好とあり械を捨るを先地
りぬとも友船ハ終不見之に雲霧トて少くぬ
起りぬと六類不色地既不目ト言余乃及以ト時
水に舟蝦夷人少土地の容子をあらぬとも時を不
物々返船甘トて不後ト事内を求むる事
便りも少くとも霧ハ色少く風ハ強く波濤ハ

よく僅小船を多せて是也ハ險阻ぬ是雁を
波浪よく濤きまきまて海水逆立中、ぬく
船を多しに船も少く是船少く沖の方、あは
日ハ多雲霧少く四方周く船不船の二隻を
舟のこし船不船少ぬる内不白ひをたぬ蝦
夷人何とて白ひをたぬりてその船ハ于蝦夷人の
額の上、魚の骨を載せて呪を唱ひ首残たれ
彼舟は席不席一あたる有候を視て考
の御子、少くも是少くも漕行強きと云ふ事

方へ船を多く見せしむるは女一の定間の御りありて船
を法けりり御事幸に命令を賜りて船の上りて
定の中候ふせり嵐窟小室に候る食物も向く
只火を焚きて食のつひをえたりたるのこし
候ふ蝦夷人たへ合ふるもせしめ候て蝦夷海邊
をわたり又ハ款を祝ひ踊るを躍りたりぬけ平
定の樂をよめるも當るに感ふせし事之合ふも
せし憂に艱難し逢るる疾れどもと氣力爲
くえ事しふくぬけ事たふくく蝦夷土人の

確ゆめを見しと人小群島とよりたり

物を問ふ事

寛政元己酉年七月江戸町人常盤を力た馬と
しつ者を伴ひ長谷俵物所用と号し蝦夷地
を往返して相示す内番一掃毎せし一月年の
長東蝦夷地不務勤りりて相示方味方せ
蝦夷人太鼓おれりて是より遠るせし不依て彼
務勤の状を尋問の爲蝦夷人子と呼ひ罰不
天の云 酉年の年小行手し候ふ蝦夷地の終末を

智いまをぬらして禮武の礼儀をさしへて守り同せ
ぬ、強執の容をもゆるゆる解せし其守同
の法武ハ先ツ物を守るふそ之の制ハないとい
ハ祖文も存令親父も存令伯父存令叔父
存令之知已の暇美人も存令之と存令之
同ひ返一同じて制ハない故に同ふ、定武なり
ぬ其暇美人の親族に死去したるをも知れぬ
母もぬらハる方をとりて號哭しし其まの儀に
方ら其暇美人の親族を指ししをとりて守

ふ、愁傷の儀を母をさしへて必號哭婦
泣き其跡ありて暇美人必嗔し其事をいひ
をけ償ひし事ふ、乃ち之儀に死去したる者の同
何某ハ母とて存令死なるといふ控程
其時け方にも感人の脚をぬき事とて控程
はさる暇美人の定例にけ方にも親父の言
事等守りし事にも今宗略に時をけり又
詳ふ筆記せんといふ所也

ワクナイし事

松前家臣より上乗より役目を梅鹿皮鷹鳥羽
松前より梅鹿皮を
鷹鳥羽の種をいふ 物としの皮をぬりて
課不採るを主役之叶役の首司
松井角之清承
りてアツケしふ上乗よりぬきたり
時不日所の
由らしてビバセイ村よりぬき
其村のし名を獲
きり租税とに課定役有り
日利をよめれハ正
芝借物不採る依て首司の松井角之太夫懐
アツケしの物とし名イコトイを呼出し
公儀を
とけしかハ鷹鳥物を真物とせしむ
ハ物とし名の目

の右扱ひゆき
依てイトコイ被
ビバセイのし名
しと未めし
迄至人の化業
めて日利のま
りてハアツケ
小遣りし
をぬりし

自己の地帯を収めて年吉を如くして利益をいふ者
なりん通網林たるを右捕へたれもアワケし小宰
を収めて専ら板敷有見を假宰山とつらひて
宰令をさせりり干日分へ向ふしよれた食事も
何となくさしむりり時方を固めて干通網の捕
場の裏人とも大勢群りしよとて種々候ひたれ
とも有司お井屋を評定せしそ因とて
乙名イトコイを物外乙名大少使し七千等
高令一集り評定しりり通網の共業六蝦夷人

ともを左候ひ通網を上も控ひ下も亦は
役目めを付て通網の難儀六蝦夷人向ふ起
りり六等用少は控室かこりり付六めりり
立つた地帯をさす大勢の蝦夷人等者人を
てお井屋を評定言せしよつたしよとて
出た地帯を評定せしりり乙名も控へ山中
小作り候し初飛し候室をたす陳太力合口の
能刀鞘是の太刀等守り初飛の室おあり
をたすしりり六等も向く國許へ林をたす

板倉分出させし料を赦免せしと云り今も幸り
て予時不徳を室相に相并痛むと云集の取正
しりと述懐をさしり余天明古兩年の復此
アツケし到一時悲し名イトオイ少遇ひたり不
親親のれ命ふ相并痛むか苛政の行状を
具さず聴りり故不民を潤ゆるの奸計あり
見笑ふ事ひくさるるを天明古兩年の幸相
城下に逗留の内せたる風流を國不價令
三十余石の交易をせし陳太力腰阿しり

とりを神ふたりと云くを相和府の後ふ
拂いたれ大令をたしと云事今も到り
しひあり嘆く空兒の事ふ小娘や俗不名付
てゆきりしと云者ん懸を空兒もたらふと賞付
の只に家政をれ評不餘りて阿手れ果り

手習い書

天明古兩年の夏東蝦夷地行くと先驅せし
時不日中人の余大蝦夷人の中ふ交りて行く先兒
不毎中ゆく國地を遊し心内は妙不蝦夷言

語も未熟なれハブリウエシと云ふ若兒也人の曰ふ云
事をも芥断られハ此玉人を余ハ僕と可し連
向ふまじり時不此蝦夷人文字をそひひらた
を教くたり一依ハ行假名よてイロハを教くたるヨ
ソ子十強習ひ居るハ余不向ひて不此イロハと
とふは何とト言ふあまりりる也ハ切のりりる
と云同余云々曰日印の社名ハ弘法大師と云
聖の正制化也て上ハ天子が下庶民と云は
文字を不切のりりる一用ハ上下の情を
通す

教ふ奇妙ぬ物之神のまゝ云ふハ余もいふこと
をを切つた神のまゝのハ四七文字をそひひら
の事を書記綴るふ事まゝのまゝいふ
事ハ一奇妙ぬもの也何んを梅譯をいひ
ハ彼ブリウエシ疑ふことりてその後ハ
子也り依く徳一也の爲少何りて曰吾を師
我ハ汝ハ我子も曰不云ふハ暗愚のまゝを
持ハ親の教ふて予方々情ハそひひら
只今ハ蝦夷のまゝをいひりるハまゝを

世上亦羨求て何の言もなれば余も亦て恥を
何と云ふ能くしつられはちか感心し平後を出
程せし平祐彼よりウエシと云ふは我ハ日本の徳
風俗を好むもえは蝦夷土人の姓無きやれはかく
愚鈍は何事ゆゑしたまへ流ひたり余も返死
能く考ふとは身自我が夷狄なる事を早下
し一命絶せし志も我も便めて胸中も堪へ
兼感涙を催しせしはれも終つて假名をいひ
是より其後上は平河平流有るは思ひひく親の

めふ事なふし終に便をき給けり扱けぶり
ウエシ松前迄連り途中糸波村の百姓白鳥
新十郎宅に一宿せし時小戯小紙を写させおそ
書せし見し事そまを絶ふより時不亭
の曰未代末國の好むをそとてまを堂敷に譽
たりたりまを松前不泊りして師方の内におく
物を書せられはけり自然に風流なるをた歌
頌をかくまを之をれは蝦夷土人ハ文字を
教く事す或ハ日也をまをといふ事なまをの

杜少制之而具科余亦何事之松島家々たる
然るを文けざる事出終是非も之に牙之是
蝦夷國今も既不用金の時不熟一利りたれ
之れ良玉ともなるたれお前家々憎た
りも解さく一も杜少制のよくを國も皆何事
和語くくたる國民等の凶火害と必田の教
多あり被是たる時をゆる喜ぶ若人といふ
ふ所あり一前章の如く人道を杜少制を
とも近のよびテロシヤ國の赤人教多海

彼國の法令をよし松育教導をれいふ
大小儀にテロシヤ國の風俗不化をれい何れ松
前はあふ杜少制をよしと國故にゆる事あり
よし俗不所習ち海をよめてぬせつとい是を
ソウたる一用國の時ありたりといふ所之奈
月也玉のせ残るけくといふあ後の報もい
義不せぬりて所誌と

歌く文句と事

西蝦夷地ソウヤ お前を丸海上
岩人余をり 志くくお人の風俗

を視ふ不遊ひの座無の戯少き事めて口不氣を
咥へ中指の爪めて降きわしけおふ不國扇を教
のぬれ物を打物ふをたり難し少ふし和て流ふ
歌の章句を翻譯ハヤリはる事たのぬし

蝦夷國始て用りし時不十二てまの虫腹を忘
し神と口と重の廣腹を忘したる神とぬ神
のて降りし時不虫腹を忘したる神をいさくん
ひて此を不神とまりたまふ祈りき教りき不
扇腹を忘しし神を六倍し追高以倍く

極を元
依離空

七神天上とく終少母の降ぬる又虫腹を
忘しし神ふ此を不歩りぬふけ神に西掌桿の
神とて扇腹を忘しし神にま教の神ぬ
しか天上のぬし白く蝦夷玉に極空の地をぬ
十二て神のけを不ぬりぬて祈りし神に
多兒西掌桿の神もぬた單衣の神にまの
神もすうた表秋ぬて馬控りぬ依て蝦
夷國のけ固候もてま教の生まぬた神をぬ
け非蝦夷人因士の物治りおもちも扇腹をいふ

そも身自り夷狄なる事を恥て謙遜し
見ゆを慕わす。其意多し。依く松育教導し
賜し。今令下の路。ふたつて。勿。良民。も。化。生。ま
今此時際之此時勢。ふたつて。國國の大業を創
め。是は。た。親。不。世。法。せ。る。も。遠。不。ハ。完。玉。成。就。して
最良。ま。必。疑。る。る。一。口。ま。カラ。フト。始。り。手
前。あ。て。カラ。フト。始。り。お。對。し。後。地。ゆ。り。向。う。國。業
成。就。の。こ。ハ。繁。昌。の。土。地。も。必。然。死。不。也

喪禮一書

予金山の古跡を穿鑿の爲。不。わ。不。わ。た。た。た。た。た
ゆり。車。輦。美。地。也。西。了。往。ゆ。の。内。ク。ン。又。イ。不。わ。り
時。彼。而。の。し。名。イ。シ。ヨ。マ。リ。宅。不。止。痛。し。り。う。そ。夜
イ。シ。ヨ。マ。リ。不。先。の。を。三。一。金。山。の。向。ふ。せ。り。居。り
け。る。う。夜。也。う。村。さ。ふ。も。必。亭。ま。イ。シ。ヨ。マ。リ。王。也。不
寐。而。を。せ。り。別。宅。少。り。そ。て。即。ち。居。宅。數。多
ゆ。り。て。皆。一。間。作。り。の。少。を。掛。け。て。も。別。宅。不。わ。り。手
寤。る。る。を。同。く。さ。て。り。不。付。家。ハ。親。の。家。也。て
ま。の。親。不。別。也。よ。れ。ハ。別。不。實。持。家。を。作。り。て。ま

彼の家不寐もその予ま人王家不寐おくは
聖旨令山不道引先ましく行りか子解帽
子を冠り日躰も怒れ惶ろこの有てとりは
蝦夷の喪れきて二年のらびて思ふ事可
又蝦夷地法不家地境まこる跡何れ也蝦
夷の又不別道家地境を捨て喪れを替
つる子舞歌と日女の人とも認めらるる自心
自心あしく天女の兆しあり

嬭姑と事

天明六年の秋歳令山園て東蝦夷地ニシベツ不
到り船の修りを休せし時不杉木の老ふて言
箱館五右衛門村の若者己し助けぬ人の通詞
も不吊指寄て捕場の女は網納を名酒を
もちせし時子役船のまきもて一夜通詞二人
予酒を酌て暫時の同樂しつり時不言ら
小蝦夷浄海尻地をくせ座無にぬるらん
のり不乳女蝦夷二人も不不思ひあつてあま
しく括りたりを言つそをもは行しつるに杉木人

於て世を親のケ線に何事たりと抱く時
を忘るるの何事なりと云れは抱く事ありと云
ふに抱く事なりと云ふの由も
りせりて千五百九十八の升もひきまの
飛りかしのめめ教りぬは何事や
小室通の法非をとりて
ととん計畧飲又ハけり
是る本は何事なりと云
法にハけり云ふは
世にハけり云ふは

いひりハ女蝦夷と
ありありハ海海記の
世ハ女蝦夷と云ふ
知るハ女蝦夷と云ふ
男ハ女蝦夷と云ふ
世ハ女蝦夷と云ふ
と云ふハ女蝦夷と云ふ
かぬハ女蝦夷と云ふ
教りてハ女蝦夷と云ふ

夷土人の娘姑の津見もの母を右津のり我子後
拾て置け、日頃遊て巧るをとりけれを
とりけ後とりて種我びて其種を儲りて
りありけ之種をとりて計畧に付偽好日中
の人の乃ハさる所也

毒毒の事

蝦夷地ハ於て毒をとりて千毒をウツして千と云ふ也
蝦夷地クナシリ等の服て名ツキノイといふ者あり毒
毒は合拾ル人あり而毒を毒の毒別らうは所不

家を造りて其身不任せ毒を感ハ五千里或ハ三
十里を隔或ハ海上或ハ室隔と云はく少も毒を
こけツキノイといふ者も毒を感蝦夷人毒毒を感ぬ
扱ハ土地の風俗之あり付ツキノイ之地ニ魚を
船に積りてクナシリ等の運上少なりあり交易し
代り物の事ハ種々少物類を積りて運送すれ
少るを造りて運上し積りたり其運上あり
七里隔りて本位居せし毒の方ハ年々種少物
をを配りて但今ハ種少物類ハ年々種少物

花送りをせば其毒を極きて湯酒を送りツキ
ノイ方口呼び使をせせばツキイり先々に連去
り死毒を承ふを川に到せば湯酒を割り食
應し毒を承ふ酒毒を極く遊身毒を毒を大勢
毒合ても怪ま嫉妬の毒もかくはれ毎夜暗をせえ
憎美お地の風俗之太身少身少腹を旅かせき旅
高内等我お地の毒を極く也家賦と推りて
巡り去り是蝦夷土地の風俗之早と毒を承ふは毒を
送り酒毒を極くのし升少食の毒も向くは毒を

有り我身をまきしツキヤウとい少樹の皮を採り
アウしといふ太布のぬれ物を織り衣被と為し
又少指の事ハ蝦夷の婦人の所へせえ又太身の
乙名杯ハウタシといふ家も大勢を代へお地の家
言旅うせきと物ハ此ウタシといふ毒も俱り
後ハ少手もウタシといふ家内少結落先少遊り
てかせきまあるはりの是蝦夷土地の風俗之生涯
住家を定めおれ千石の海を不住居は宅ハ皆少を
めく極毒の尻山ありて又又少を他を

任長きしは涯迄かくのこし是耕化の事を
と稱すは心なるをこ

漫稿の事

天明丙午年蝦夷國見しは用ふる船は
白船中何甚る久もくし其の申船神道五仲
船政を志す船令少候し松本小舟船五
表地ニしべつと海海蝦夷地を海の船路
能くありしを松本家の撰少候し松本唐津
内河の者より道先役の申点あり船ニしべつと

ふた川小舟者名を此ニしべつハ例の秋の彼岸小
舟は川の原の方と船路く瀬く之予に役候り
なれは渠より下船し同年八月廿七の時以
川舟の佃舟を足しりかきしり又翌十八日朝
舟の舟より小舟小舟をりしり西を
去能くを撰り九月七日をりしり九月
月十九日拾之の舟を去しは船中少
く船中少大なるを去り中少候しを良
る中少を撰り船路を去し大船九方

之以上を積むをわが家の定令にせし事古く
同一の物日数元其言し内不採る是極産
の正山女於猶也

疾病の事

疾病ハ人同く莫救その別何れそ日本人の腰
腹は異必事教多あり先づ腹美人の目如
俗化 際より其様をわが領主の令せし
所分れハ永之不化 際より 假令も腹美人
目如之無事とを二通辞是を責めて今亦有

たる科の節うまに多と責めて償とて之科を
出 自罪を何うたるとせし又養生之用も
早くと前章の如く草鞋脚布を履用れハ又
律を通致る目如俗化 際より 假令と
をわが領主の按之依り既足素脚布て定角樹
根を系を厭ふと社返一雨分れハ天窓
活也我家不悔ても体俗ハ世も定不歎其の
め此境界之是皆今令のよとせし不之
事目如人と控れ事人同くハ疾病も又

等是等之此有示瘧瘧或ハ瘧癘流行事れは之
る事異ぬハ一依ハ思惟して家宅を瘧て
深山幽谷示進行行長其處所の瘧病絶て
後立ぬり古ハ示行長之親子夫婦の内ハ瘧
病外抱ヒ止進天其他ハ皆ハ是難一見難みく
進是之是皆醫業ト云ハ是之餘ハ示進五
之形後方是五ぬり思ハ人同ハ有物哉ト
吾身少引別ト顧ヒ我日本中代の何ハ記
ト高難有事ハ志進難地ハ思ヒ

言啓一書

日本記神代是示ノとの三字ハ祈禱ト訓ト
暇美言母ト云ハ祈禱をノト云ハ之ヲ暇美
人抑めて制ト極く極めぬ示他ト云ハ老を
神示ハ抑けて是即ハ又ハ又ハ又ハ是又
神代の進結ぬる一ハ神道の事ト云ハ
本道の度人家宅の造立の時棟揚の段ハ
棟木の上リ建ト物示海向ト云ハ
白帯白麻を垂ト云ハ白帯ハ麻の字を

又廿と降ると云々又蝦夷人の神をカムイといふ
 神居の轉言を云々神居宮居鳥居宮居鳥居の
 八助語ありカコイといふも此法神の事なり
 を序部中て云々むせんといふありカコイをカ
 ムイといふも同一又座を又イヤといふサトシヤト
 轉々といふ之縦ハ物を捨つる事を云々をウチ
 ヤルといふも一皆連を云々いふと轉々といふ
 其外俗泊解髪女子等の蝦夷之業ハヤウ
 日中の言結ぬ一は俗の物の名ハ俗事也是
 故の

天字の能い	シシビリカ	空々	ウヨロ
能い	ヒカトウカ	空々	ウヨロ
雨降る	ルアビ	雪々	レバシ
風々	エイウケ	汗々	メト
雪々	ニシヤム	霧々	ウハラリ
霧多	ムシハ	霧白	イロニ子
	ホロ		シタロ
			テタル

汐起り チウイ 浪うま カイベ

汐干潟 シウテキ シヤム う移る者 ウカニ子

風景好 トウイ マシユ 寒く命 メイシヤム

暁の目 ヘケレチウワ 夜の月 アニテカウ ナユワ

雲中八岐 トクシケ オアケ 雲中涼 シリクニ子 ヤム

山八遠 キレタヒ 海八近 アトイケ

火体焚 アベ 水をぬき ツツカダ

大平の沼 ホロシノ 少々の沢 オシノ

伸を引 レポキ 足を疾 ヤベク

彼奴極方 子ノカモイ ウタレチツタ 進せぬ イテコレ シユイ

此奴孫の衆 タニカモイウタ ヒウチヤケタ 舌上た キニニル シユイ

流待より ニシハ ナロリ 載たより タイベ

具形句 チヤカタ カリ 昔より クイカリ

其方念 イトヤ 此方念 イラモシカシ

先手 ホシケトウ 踏小 モイレトウ

目 シヤツテリ 多 キロ

陽 ホフケ 飯 アテ

何 イモク 船 チホク

何れもあつて イシヤマク 枝を葉を シヨモユル
アリキ

あつてあつて 子ハアリ 是ハ チイハカラシユ

あつてあつて シウホロ 下を キロラシテ

あつてあつて イヤカライノ 陰を チニラツチ
シニアン

あつてあつて アロイイ け人 クニクルチウタ
イハカン

あつてあつて ヤニヤイコ 指 チヨウマイ
ウメハカリアン

あつてあつて ニエウケ ひつ トヨグシ
ハム

あつてあつて シゴヤ 火 アヘルイ

あつてあつて イヘル あ ラメヨメン

海を遊 パトイ 川を遊 ベツ
ワラニエ

遊 イトニカリ 急 チカラムシ
ヤハシ

所 ケモ 物 ヌンエ
アンベ

其 イナニ 方 コト 久 コト 名 コト だ コト 名 コト

蝦 アイシヤムイタ 夷 シイシヤムイタ
チコ子シヤ

只 アンノ 進 コヤシテ 人 イホク
エニシヤ

あ トアシタ ち シユイ の ナ 方 タハシタ

喰 イヘ ふ アシカイヤ 喰 シヨモ
ユルクコヤ

喰 ケイウ の ピリカ 包 フウラ
ウエシ

是をいふ

タシハ
イヨチヤキ

子成り

子アシハ
ヨシルテユ

能はる

イラニカシ
フウイ

ひらけてラセ

ヒラシハ
シヤツケ

そ方、任せ

ヤニシ
カイ子

ひらきさぬ

チヨウカイ
シヨモカル

是ハ、まら

タニベ
キコウテリ

ともあぬ

シリクラン
テレ

あふぬ

イカタイ
シヨロイ

はらして長き

ラムウツケ
チカイ

ア、むら

ランハ
カシムケ

サテやあぬ

ウニチタシ

此、なほ

タシヤ
ラ

なやあぬ

子ツヤシベ

何ぬ

ヤイキツテ

用をえら

ヤイラヤツテ

ひらり

クラムトイ

大ゆふら

ヤイトバレ

ゆりて

テキユイタ
アリキ

脊肩そゆ

シケカル
チニシ

あせ入る

ヤイカタ
ア

悼多

シノチアイタ

あせ

ヤイカタ
シヨモキ

悼七世

シヨモシカマ

あせ

イニケ
シカマ

あせ

シカマ
アイガツ

あせ

イニケ
イニケ

あせ

ケフニナリ

あせ

ナニゴロハ

あせ

ヤワガイツ

あせ

あせ

アニチンゴウ

あせ

ホクウ
ホクウ

あせ

トニナシ
トナシ

あせ

クシユ

あせ

ツイ
シヤマタ

銅山

東蝦夷地しへつのもろ山へ向う紫飯左の山へ向う

鐵山

紫飯左の大森村石橋村よりい升改本不多し

鉛山

見市村の奥ヲボロ山麓最上なるといふ先年ハ橋村の老婦
とて耐下年ニ高嶺後年よりテ外毎津村ハ橋村より有
ソウイナストロト下終止此令日本ニ未見也也云々令色女
細工上陸の毛皮扱ふと赤く陸海くす不赤是物造せり

黄銅

平上り終ニヨフキマトソ不不至野置きて時々根ヲ用
食すると色色をく條のせとて少少以流くけ終は海
せしとて友船子別也年々使物も少く草の根を林たて
け土を入也食するとせし不其さからく終らさし

銻銀

ニユタニ終らなりより石を海を子かふる不れて日利を
取評究て佛取青と名く取アを獲ヲ用ら土銀の
物取をわく終自らとらふ

磁青

紫飯左の先キ石橋村よりい流とソハ新一高ナ又此山
麓小又川とソハ川多ありハ戸御子ハ彫せくマ
石橋山と磁左日中運送馬

硯石

西蝦夷太田山の侍地飛告置の岩窟下向るといふ

鐘乳石

クスリ場本の内ベツシヤフ村少あり

石炭

松前海邊何方にもあり色赤く松の葉の如く
赤前通くニ床飾り不用

海松

俗小蝦夷海邊を唱ふと我海邊ハ色あり色おそ
まゝとら友物と是を床飾物用也

汐凝

正サニ山に山を制るは事依く少人拾ふと

明礬

正サニ山に山を制るは事依く少人拾ふと

温泉

大沢 カワクニ 森於 飯の湯 正サニ 山の湯

黒花百合草

アツケし迄今自らとらへり

白花春菊

此春菊ハ車蝦夷地あり

秋萩

モナニ村ヤモキニイ村迄あり 輪の回り早以上の物之

竹篠竹

シヤコタン竹を西蝦夷地シヤコタント云ふ也
生れ竹く是れ竹虎ぬあり

牛角

ウスアケウ西處を最上と云ふ自然生れ其根の左キ
四ノミ人余アリ味ハ甚ク重なり中ノ小藍の宜
ウラカワ樽子と云ふ事互に相違家長ヤ川角は
車部山物あり價キクぬと云り

一角

メソイチヌトロフと云ふ物分ちる赤人云々使せり

白熊

松前ニ渡地捕多るを云々奇異なりと云り

銀鼠

車蝦夷地ト云ふありいさか少く少物云々ト云
又稀ト云ふ事あり

金海鼠

奥州金海山の通云の海上なるを名物と云り
他ありたりは扱ふ人余一車蝦夷ニラ又カク
スリニ成ハクナリ味重なりあり
赤人のめく尾角を叶角の海鼠を名りてト云矢
之根ト塗りて鉄を射ス一文ありと云ふあり
角を尾角ト云り

アノキ

ムリカラ

大蟹云々云のモリ人ト云ふ味ハ甚ク

セチコロウ

あんこのめくぬ物と云ふ因置く味重し

カチコルベ

取ハ洋ナリ其角用云々云不極云々其角也
其取ハ云々味重し其角用云々云不極云々其角也
取前云々コトト云ふ事あり其角用云々云不極云々其角也
鴨ト云ふ物のめくぬ物と云ふ事あり其角用云々云不極云々其角也
味ハ云々云々味重し

テシベコルベ

ロクシ

アノケの少信云々性ハ重なり取ハ角なり其角用
刺未ナリ其取ハチコセト云ふ事あり其角用
蝦夷人ト云ふ事あり

チシユルコ

蝦の取云々肉ハ角のめくぬ物と云ふ事あり
取トコロの味ハ重なりト云ふ事あり

ウルツア

筋のめくぬ物ト云ふ事あり味ハ重なりト云ふ事あり
煮焚て云々味重なりト云ふ事あり

レツタナリ

取色大鳥のめくぬ物ト云ふ事あり味ハ重なりト云ふ事あり

正トヒリカ 色形え、鳥のめく口紫赤く正トロフは多き

正トシヤムナリ 雀のめくさ大之目もまゝなる眉も有紫赤のさふ
毛有りくは是形也

クニ子シキ 生前やうはきさういふはウリも形の子をたしあり

シリガフ 色やく形ハ錠のめくふくく身のまきんナリ有上唇の
毛并ちんナリも有山形念め物也

キナホウ 形あんのめくナリく人け急の腸ハ他腸をとり
腹中、帯布を入又無くもさる也

ラツコ 首分ハ猫のめく是はたう雑音もナリナトセイハ
似たり作候て食物を喰ふニウルツアは口ニはは物

暹明麻 形は人知る通り海鼠なり

ウ子ウ ナツトセのたぬ物と候地何れも是形ナツトセイハ似り
海鼠ナリ

オシ子フ

蝶較 西蝦夷地ハ産不出る東蝦夷地ノタチイ色も出

海鹿 千ヤホ、エウレタ、ニツ子ツフ、イタナシ、イタシへ五種ともは
アシカ之形赤身ヲカシカを名カテトビタリ

海豹 シロトカリ、アサラシ、ヲラタ子、ヘクト又ニウシボキリベケツホヨミル
ムシベ、ニクイ、イタシ、ユボヒリ、ケシヨウ、マイトカリ、十三種皆皆也

イルカ ナコシテレケチロシ、プレラニカモイトウユクコシユニライカラ
カモイ子ハイコイキカモイイナムケフニベコイキ五種皆イルカ

鯨 イユルトナイ、フレニベ、タシ子、ベ、ユクンベ、チキリケン、ベイトナ
レヲカ、アウレ、九九種有皆鯨ナリ

錦 形あつて十種あり又なつてツハニ種あり冬獺也も
あり種も是は是之玉のち急之は州のま腹くとナリ

段物 巻物やくはしる綿菓子菓子の新之者も是物

青玉 大分海魚色之中玉少玉ハ種々の有ナリ

タシツウ 織なると毛纏みく抱物候の髪音多くと物て候

煙筒

白銅細工の彫物アリ 飾りを入るものあり 日頃
七宝細工より 銘をテリしものあり

此物小燈を座物にいけて 足り工帳立具等あり
備書小載りしハ 定小器也 又座物ハ 金
銀の浅き座物 羅紗控の類也 出るとも 小座の
座り物を馬に踏出 海邊の 舟に 物小大竹の類
細の座物 舟具等も 時々 小器也 舟具等も 備書小
のせしれハ 定小器也



